

山村仁志(東京都美術館学芸担当課長)

コンクリートのはつり壁に囲まれた巨大な船底のようなギャラリー A の空間が、いつもより軽やかに見えた。

ロビーに面した壁面はガラス張りになっていて、地下3階の展示会場が遠くからの俯瞰でもよく見通せた。村上亘の床置き巨大な写真作品は、A4の大きさに分割して156枚に印刷されており、各縦3.5m、横2.7m以上もある。格子状にみえる各部分間の余白と、タイル床面の目地が白く響きあって、リズムを奏でていた。それはまた、作品保護のために床面に引かれた結界の太い白線とも響きあっていた。5つの巨大写真は、部分的に重なって見えるように精確に計算されている。全体の展示構成は、村上と本展企画者で建築家でもある小林丈史が、ギャラリー A の空間に合わせて念入りに計画してつくったものだ。村上亘が言うとおりの、まさに「空間全体に写真をインストール(組み込む、導入する、据え付ける)」した印象である。村上亘は、カナダ、アメリカで育ち、上智大学、カールスルーエ州立造形大学を卒業し、ドイツと日本で作品を発表している。初期には写真に色面を施しながら絵画との境界を探る試みを続けていたが、現在は日常風景をモチーフにして構図や色彩、そして絵画との関連をさりげなく連想させる静謐な写真、「still life(静物)」シリーズを継続して制作している。

森島巴美は、多摩美を中退した後ドイツに留学し、カールスルーエ州立美術アカデミーでゲルハルト・リヒターの学生だったヘルムート・ドルナーの下で絵画を学んだ。2012年に卒業後も、10年以上ドイツに在住して絵画の制作を続けている。彼は、インターネットで興味をひいた画像を収集し、保存、整理している。森島にとって、ネットは圧倒的に日常生活であり、風景であり、現実(リアル)である。彼は画像を選び出し、絵画として描き直し、加工する。短いストーリーを想像しながら、画像の背景を平坦な色面で描い

て制作する。フィクション(虚構)の構築や演出ではなく、森島が感覚的にリアルに感じられる絵画世界を作り出すのである。例えば、外国人の子どもの横顔を描いた一連の小品があるが、ネットから取ってきた画像を元に彼が自由に制作したものであり、子どもたち個人については何も知らない。それは、ウォール以上無個性な、ネット時代の無名肖像画だともいえる。

鹿野震一郎は、名古屋造形芸術大学在学中にドイツ・バウハウス大学に交換留学し、卒業後に再び渡独してカールスルーエ州立美術アカデミーで学び、現在は主に日本で発表している。彼はトランプ、サイコロ、レンガ、小枝、フィギュアなど身の回りにある小さなオブジェをモチーフにして画面に配置しながら描いているが、その多くはゲームや旅のお土産なのだという。だから、モチーフの選択も「たまたま」である。鹿野はまた、以前に描いた絵画を白く塗り直して違う絵を新しく描くことが多い。下地を全て塗り直すのではなく、その一部が透けて見えることがしばしばある。それは彼独特の画面空間となって、絵の深みを増している。鹿野は、油彩画という技法が、偶然や重ね塗りを許す「メディウムとしての強さ」を持っているがゆえに、「絵画は飽きない」と淡々という。

3人とも、それぞれの方法でモチーフ(画像情報)を発見(収集、保存)し、制作(加工、処理)して、展示(共有)している。内面的な何かを表現しようとする深刻さはほとんどない。共通しているのは、そのクールでスマートな姿勢である。それは、私たちが日常スマホに気に入った画像情報を溜め込んでSNSを通じて人に見せている日常とほとんど変わらない気さえする。ギャラリーの中で、その「軽やかさ」は実にフレッシュに見えたし、これが彼らのリアリティなのかもしれないと思う。